

J.M.W.ターナーの《光と色彩》

—J.W.v.ゲーテの『色彩論』受容と記録者モーセの意義—

岩永 亜季 (九州大学)

J.M.W.ターナーが1843年のロイヤル・アカデミー展に出品した《影と闇：洪水の夕べ》と《光と色彩：ゲーテの理論—洪水の翌朝『創世記』を書くモーセ》(ロンドン、テイト・ブリテン蔵)は、共にノアの洪水に題を取る連作である。本作はその特異な表現に加え、J.W.v.ゲーテの『色彩論』受容という点でも重要である。『色彩論 教示編』は1840年にC.L.イーストレイクによって英訳されたが、ターナーは彼と友人関係にあったことから同書を所持し、書き込みを行いつつ読んでいた。

従来、研究者の間ではターナーが本連作においてどの程度『色彩論』を積極的に受容したか、あるいは個々のモチーフに関して議論がなされてきたが、構図そのものに『色彩論』受容の表れを指摘したものは管見の限りない。本発表では英訳版『色彩論』のある註に着目し、《光と色彩》の構図そのものとの関連を指摘する。

『色彩論』§919は、色彩のアレゴリー的、象徴的、神秘的使用について述べており、教示編の実質的な最終セクションである。この箇所にはイーストレイクが付した註を見ると、ダンテの『神曲 天国編』第33歌との関連が指摘されている。『神曲』の該当箇所は、至高天に至ったダンテが三位一体を表す三つの光の環の中に神の影を見るシーンである。この場面はその重要性にも関わらず殆ど絵画化された例を見ない。しかし、ターナーも見知っていたであろう、当時有名であった、ある『神曲』挿絵には第33歌の挿絵が存在する。それはターナーとほぼ同時代人であり、ロイヤル・アカデミー所属の芸術家でもあったJ.フラクスマンによるものである。

フラクスマンの『神曲』第33歌挿絵には、横長の長方形をとる画面いっぱいに短い放射線の連なりによって三重の円が描かれ、その中央に上半身のみの人影が簡潔に描かれている。これは、中央付近にモーセを据えてその周りを円形の光で囲む《光と色彩》の構図と類似しており、ターナーが彼の構図を援用した可能性を伺わせる。ただしターナーはここで、画面中央に神の影ではなく、ノアと同じく神との契約者であるモーセを『創世記』の記録者として描いている。

ターナーはイーストレイク本人から『色彩論』を得ており、本書に関して彼と意見交換を行っていたと考えるのは妥当である。彼の指摘に基づき『神曲』図像を《光と色彩》の構図に援用することで、ターナーは『色彩論』に見られるゲーテの神秘思想的な色彩解釈を強調したと考えられる。そして中央に描かれた『創世記』を書くモーセには、色彩を科学的に解き明かしつつそこに神秘的思想との関連をも見ているゲーテをはじめ、科学と宗教の狭間にあった18-19世紀の「記録者」たちのイメージが重ねられているのではなかろうか。